中村俊定文庫
文庫 18
268

寛保二

之だ美葉集

玉葉撰

栞雅亭

卯月九日玉栄をまねきて
名誉雅談あり　時に候人の日百負
の興も何ぞ可ならんや　乃ち俳具を
独吟歌仙合はせまほしとぞ
ぞ　元禄の末　晋子翁や
つるを持参せる仕　金玉の言　詩きものを
古歌を作へきを　天葉伝
奇句をたはふる　向ふ玉栄諾して
曰　其堂　ときて　十人

ありかの天に垂れを去ふ所を可ん人と
庭畔新樹蓊々として風景の美
柳を卸て蒼々満庭の赤を
しらさの手投して詩を需める枝
美を無ふと名つけ伝来
宮人伝こ
うのもの
いのと
和夏下浣　梧陰主人

第一　玉榮

こゝ後〳〵ゆら雷ひゝらゝ祭うゆ
清き月見のひゝ踊るる鳥
現世袋磯ゆ山のまん
都遷ちん苦ひ貝ゆ
樋の實ゆ秋ゆ蟹〳〵風の月
ゆゝしう重ねひゝ居ゆ間

雪隠に珠数を掛ける家の名
もいろ〳〵ある雅力の形
造営をする位の立ぬる紀
紀のうしろいんの桃灯
又もうの後とあるは大鼓
夫の蔭ぬるさへ隠れ家とも
馬をふるれば言葉の文

雪ふる梅のまさに咲ぬ身
もものてらをまもる心易
常の邪は使く腹合て友近き
痛い腐を脇師ら
名
おい詩いかをいきなるの精進は
文を書かまさに法華巻
吉原八間のひらの赤ふく
ひらけるの間る晩

夏のて蒼き蚊帳の内
胡坐して飯をいそぐ作殿
金銀を鍵する引出しあり
小鄙にかゝる朝の晴
熱い茶とたこの字を焼く
各い嘶車後をかゝえ
ちゞまる鏑りも夏の弘ちゞ
まる一斗と憎いむ雨

木葉の白ひっぱいを縋ふ
逆沢沼をゆく影は人表
藁葉を履く人はとゝ行かゝ貝
紋を漂めるきゝ尺八
板の陰に空とゝるれる暮景
牛の涎のうゝまれ美家

了解

金聲

かくれ貝　高山

小野

海棠四句　たもこ　みひろ所

木くもり

朱

夏の月

ちもと句

後句ワキ　ナカ　四句目

桂垣日　書紙　もろち

二

朱仲

さいりちの箸で撥ねる茶碗

袷を暑き所のおくづき

銭持の肩をつゝるもつれる

急よ急れ　ぬるゝ　重

ほゝ　いと人こいふこ青の月

どのゝき聲も鳴ぐちろ唐

木この奥きの方の座やうの者
帽子似合ぬ小原女の扮
腰帯のとき此こ八ツ橋に
家中ぢう陣を敷き
をりとて閑のるる飛鳥川
届け物あり冬拈の月
きつねんの陽氣を一さい西向
男もおくと布裏きん比

さち酒きの調市ぢきふ者風
三条かゝの大津ぢうう
やうぢの濁里くゝを墨
とゝつゝ入きたものきる錦
名
胴寛の考を庵んてヨイヤナア
寺のうしろを食三味線
常ときを樹ちと笑き東山
いきゝ升てんがくの歩

なぶや川の女房の月に花もなき
寂々死にそこなひ原の僧
条宮のやうそくと山つつ
嵐よつまるく駿く赤貝
雪鳥さりいにを指さしル
沖の会み日とかのこし
泉子の掉さし後るきふの月
歯形をと入るふる浮物

ウ
カ
ふの色ハきさらい梅のとき
一度でありう姥捨のあり
第人なる魂さまを笠と秋
いふ掉する時ぬ百八
花ほも演の真砂と咲はきり
物形つるを見るの山吹

了解
郷音字
女房　高山　二句　侍亭会
条文　海　葉　三句
木々の奥　朱　赤裏　こちらなき
もゆるし　六句
後句　半ば　京中雪　古京
書為　百八

第三　玉城

塔のあまたは唐繪の若葉哉
隠のはらさ秋かんこゝる　嵯
寂世強る碁石の垢結ぶ似て
漆てとゝまれる瓶の房
海辺の巖の穴こ宮月
妹を南も

ちぬぶ山ふもとを離れ行くめ
もとゝ系統神やうけ見と
沸仕ふるとはいとあるとを又世ふ
女のちさいふ人のくるとう書
冷級の山いやきふり
確ぬるこの春来　朧扶
上野ともいとあて姉ものに戸
横へ更ひ切角のの

紅屋昼い恋きゝ久すこ
ちろものの酌の胴中を殺
ゆふを畑こを見ふ変
ふるこの花ふ月の月
武士の数ふ奥ふ光
伽羅なれとゝ金琴の射
色ゝなふ来て孤遠き
西へゝとゝ軒かく

拾ひ人のあまたまて祝をはてゝ
うき世のきぐ(瑕)をこゝの春
箕面もきゝ原吉原の山あゝ
借りさせ馬よ長されるを
餞喰の酒のこゝをを抜くて
祢宜の隠居のきたの利き
月の雪清のある林遠く
菌のあまるまる隠居思ひ

花火賣豆のあつきまきあも
客さへ見ぬ見て覓仮ひ
らかんを殺す箕る魚の数
二日かまて雑力を研ぎ
李梅の石臺清き苔の色
簾うゝ迎る蕨砂雪

了解

高山　二句

ひち我　海棠の句　たくふも　ふ〜ふ重

上野

祢宜

朱

ち後の

ちゝ句

ワキ　第三　四　雪

林もく

第四　芝光

まこかる　鳥帽の衣とゑ笠哉

庫　きめ　佐の時多　ゆ

ちだかきの肘も狐妻も稲刈て

日向ゑ小僧　抑上ゲてゐる

輪ゑ　ち力大　根をそゆて唐月

浸　の掉ゆ流る　蕣　雪

六地蔵ゑ修験ハ笠曲る
さゝゝゝを有ゝハ百屋久兵衛
車井の閑なる白き苔の色
酒のあい日を目の動きまて
友峠の又孫とゆゝるる
七つ道具と香のたきつま
下々冷の彦縁西ゝ天の川
冬氏の春や秋の夜の月

初鮭や中ハ豆月留る楼船
眼掛ふゝ夜夜十代
二重切ゝちの色の掛るゝ
厩のまちまる猪車吸ゝ
津柳のせとまきまるハ中
行人ハて庭の出る蓑
土烟小姫まゝ立て注ゝ
眺をして白杜丹切ル

ふもとなる畑の桃の
赤種の金柑もなる根性
清き泉の流るるを八ツ下り
見るとハ云へど癒ぬるの
仕方なく人も通ぬ山播
磨も二度目に引き
雛箱の名残の月を見る蓄
乞食の四つ足なるを親

捨てし神なる紀文祭り
隠しもあり地中の所影
潮煮と見れば底の吸物
池の内なる鳥無き
志賀里に見る高砂
実も小春の空の秋き

了解
金聲

もゝ血

高山二句

いのゝ人吹　竹人吹

海棠四句

海のなの　初まけ　孫の夏物

疫

朱

交吹　山姓　雛さま

ワキ　弟さま　山のも　白杜冊

片

陰

夏のもちの之表岨弦を哉

五丈

知の毛移る岩の限り

自立仲岩柳色の怪羽きく

先掃除うち地さもある

片

天高く角の角の色の月

弱もくるの鈴をりの森

関元の祭日迎えられたる夏
落花を送る人の昏たるを入
陰如して蕎麦陽ある樹を
ほゝまれる孫を歳暮
下竹竜を高く掛けて別れを
垣根に晒れ人の身を
庵賀の永遠代りに樹を送り
砂を敷き形る孫に名

連寺師を訪へて孫蕎の昏
る迫ひちの迫ふ慶む
高輪や生る盟の白火姉を
くまなる陰氣開山の墓
惣縁の扱ふちゝきま婦連
二つの箱へ陽に四つ指
嘘して面のちまる是界坊
旭るる孫 禎

奈良民ッて小刻（キリ）と屋根和銅
打ち葺き乾り集る
ほそもの欲ハ高麗ッ欲排ひ
能登ッ書り忘の郡
離ッ〳〵殿とつ奈のを門ミ
自反と取ひ和（絨）ひ猫
九輪まらるをそらる欲の多
正先ニ基台を引も

ちら〳〵と面の欠時の上郡寺
大門を如れ弟を素ふ人
囲ッ迄る獲を立て怨まん
桂の角遺噛 碎ーう和
笠脱ハ天窓の痒を毛盛
木の茅の光を切ッ元

了解

高山　二句　松の器

海棠　海棠と句　おもふ　ふる

きさらり

朱　二句　本を送り

義句　四句

ワキ　弟子　下ノ部カキ

ツレ

十五

第六　息眠

鳴人　氏神　弟子　義聚部

先米　乾く　後崖　の風

鉄　長世　蔦い　川の　世話　婦人

河口　惜の　角行　もとつ

多色カ　楽　窃の月

いり　形　乾　援　鏡　を　升

下枝に隠る種蒔の奥の片使
弓矢の鳴り響きめでたく形
心切なる撫ぜさせ　男姫君
姫君　もとのこと船なる碑
幻と殿もまた寺にかたち（わ）蓑
過ぎ去れる家八重みき
晴れ日の新八重の屋敷
遥い　小さい書の伴列

考禱面めでたく礫の流れより
父のうち流れたる　奴　そ辺
内換ぎこそ月の如くも
後金色なる橋うち渡
名　敷入きた母の徒ならひ
折姫　　　　　　　　　　
助太刀　　　　　　　　　　
一面　　　　　　　　　　

樓ひとりとまりきる寒屋のあ
聖教剃る咲の日のみしらさい
多のさ今女の下りさかるを借り
井戸綱ひとり吉原の注連
志ま二度投一角力の拍手
傳所前るく奉まれ新月
芦の穂の再入聖雑炊屋
江ひとりまれとまを吹連る井

昼飯の浮世を怪く急て涼 涼
帝を刷毛まきふ天井
くまくも強金殿をかりて
ふ面と吟箱のいさを
降ま出ぬ換り立ま出歳 旬
海ひとりくふ糸毋ふの旬

了解
響字
弓矢
高山
内換
海棠五句
女の髪
紅鉾
吹迷る井
紀清
朱
重仮
八句
象白
弟子
五句の
片便
助力
角力
かまくら殿
もさう

第七

啓史

李の原形なる事明白なり
但巣樹の事情の下陰
言葉絵なる郷理を知る事
九くよ月
紙栗もめつる世の俗時の
賜の利
も拙きれの歌

大和路や小きひ帳を入組て
百物のまつふかる舞の巻
風も仏堂買も果て行秋
みのまつる夢ふ　魂
一ッ木をいつるふて行弥陀仏
食ふたくて列幸の事外
子母の四をを借ぬかんこう
第恋ちを知る我世久しき

大敵打る火焔の中ふ吹し
第元の紙を浪の寄めく
芥川背負さんを自とも
ふもうを作まれ子顔の腕
名
鮟鱇も九相ふ登れ其の風
鯛をれ南瓜梅沢
ちすりて新小羽織をうとめ
御屋ちかく觴　元

編笠を形ばかりにして拍餅
口中　醫者の藥の苦を
有明の月枕に金をかんと町
女のむすめも　抑えても心
るを連てもしも逆の時
喰ふとつふなるを誠おそろ
明かの〜月に貢ぎし拙木魚
帆をナくらる　東海の天

夕立の降ひ流して宮迄
燃えもしらず　馬の裂来
鞭とつかれの嫁殺て取き
ぞ敬つきく笛の居住
散をあて幕のこのうまの香
おうまを形をを庭の玉吹

了解　二句
高山　笛の吾伯
なんか
海棠　六句
こう　山茶花　二句
朱　るの紅葉
茶花　遠の茅
七　六句
愛旬　ワキ　茅と　大佐々と
なるる川　羽ぶり

第八　玉宇

流れ来る丸き砂丘の影
笠のかしぶく　初鐸のこゑ
遠眼鏡小僧を肩を　まるり
針て留まれ　掛稲の風
研ぎ出ふ　稲を出ふる日夕
砂糖の中も　柚子匂ひて

方の秋宗寺とかいふ
菓屋を買ふて笑ふ出来
時々行の軽業碗とゝ陵
伊丹の状をあつらへ
ゝ生へるゝと称眼肉を
赤いゝ者の見て貧なり
大名をこれ為めすると宿の月
加役と第るゝ

重行をあつめをく火鉢
清水ゝまくみなり会舟
一ゝ花盗人とゝ
瓜をゝ千大根切
思ひ猫涅槃の舟を
鞠ゝと掛迎
江戸なり
別ゝ免て

書かし袖へ投げ　ふとは
かる舞　なるべく面白く舞
よ紅　木の風の吹　何の為ぞ天照
大神と同　精武武武人
酔ふて這入　を不作法の門
ひろ涼い自を洗せけ
風のあまた日を始ふ故桂

居ぶくふ謀の米の飯
世と世事の陰みを拾
京筋の京色の点を拾
ふい所の筋の絵いくく
天なさへ探ふさもの恵
高ふ丹　ふ三路ふ

了解
高山二句　賀舜

江戸
海棠之句　賀舜

阿弥陀仏
利てなめて　舜さん

朱　二句　大物

ます屋
ちち　四句

ワキ　四句めの名句　大名

第九　渭小

春の礫ぶつかる谷の雲雀
居てもまぶしく　箏の懸
波不車絡まるまこうを候きて
心切なる　弱上をなすわらう
泉を人生の行く自のさられ汐
浮世人を赤き者の九箏母

木兎の動きもやゝ擡木枝
釘ふちの新しき菜種一筋
住吉の踏切〻町揚き
女の笑顔まぶし女あるとそ
咽へ指突出る指の新しけ
歩行する毎に風の髪の毛
手像を刻むるを笑ひうる
今堀なり　下駄ありうれ

なるとを掛ゆきやうの自分
心をゆきゝ宮上川槽
子を花の元食を立春手梅
盥の縁のとゝ春のの
蛍やく子を唱て蛍の数
蛍を佛を地蛍　蛍蛍
風祭身を揚る夫婦を亡人之
ゝゝふて西る悪死の門

足てにく撰て史影の肘枕
京のやどさきを人へ知る
白梅や、ちい物きらなまちひ
立散の面白しとる陣笠
蕨こ伊賀しきの荒莢
時雨こもるまきの孔八塔の和
五合庵なるなり川の月
獨樹石の乗を敬る

馬醫者の五里霧里を転法
いつと定りて取く指貫
ゆく行く所命知れぬ文色
書やしる掃部帝の郎
ひとさんむの言の酒の酔
手分なる雑るの日寄

了解

鄉書字

見て足

言山二句

常高仏　ほゝ笑く

海棠　未之句

菓種　京のせゝと　味噌すり

朱　二句

殺句　朝ぼらけ

七八

ワキ　ゑの白め　赤像　元八

無死　白梅　る匠ゑ　西の碎

第十

鳳毛

細道　弘屏風を曲る美女の形

そも　大耗の卯年の夏

きせ　耗の卯年の夏

猶　四を四をみく人の形

そ　初蟹売る　猿

ゆ　の月一昨日買ふ下屋敷

ゆ　芒果の丈

一ぱいを堅田（かたた）にて
はかりくさハるみ第に徐
ちつゝ（ち）おさへ出る口の所
るるをよ作とを二ものとの枕
讀めとて人ふらめを后の頭
稿を作り稿を作り稿の多
早苗とる重雪の踏まる雪
世紀やとゝゝあまゝゝ呉後

附書院杜仁のやれ隆まみて
めるまねみを碓井の水
表の郎踏を麻よ来て月の
茅芽しく進ってんかく
毋方の秋まとゝ醫者ひとを
紅園て解くゆ二布くとれなる
神のみよ起清の筆の形振ふ
はゝくゝ山ゝ敵ゝ絶ゝ

初春の晨まとハ雪の巖間の養
敵をまりて菜苗り出る
上人の勤をゆゑは拍子利き
蕎麦よ仏合わ庭ハ花り木
蓮麻の子を新よ夜の月
子の泣と碓とうたきまる
白菊よ仙家の友吐の雲ん
ふらりくと木履鳴りき

吳巖の不化をのこる俗の
三人はきの中ゝ夏杯
物ほの面目三階ハなまの
よいたなる琵琶の絲
京の宮自慢をしてホかゝ
ゝ行ゝうけて百一枝

了解
響字
第三　高山
琵琶　海棠四句
婦之笛　医者ひとりたのみ笹
扣手　朱之句
ワキ　附出泥　柏子剣
出　不句
發句　六句目　唐の顔　子甫と星
第七き

万葉
常燈小枝をとゝむ万葉式祇廼
山猿は腰足ゝき若菜の筆端
、
すさかり里の疵もなきりし万葉入一の容
猪の牙かも　か　つまし王のとし一の南極祥
一日歌仙の作を興行してつぎのす
た庵くうとくなしめの句の　（星か）望す
路次笠は雲とそたなす万葉の存義

四季之唫

花の山　百姓たちを散みだり　米仲

日の影やふらまてをる　蝿角力

立ち帰　苔ち帰　庶の自式

一里行人　ゆを　易ふ　笠の雪

、

梅の口　月を落して　蛙うな　鳧眠

オ原を　周の二市　ほ　ほ　ほ

もつ炉やすしの障子引ちん

傘さしてひとりたち　少　敬式

、

ちち梅や　杖つく　枝を　行　尾　倒小

皆　拾め　畠へ　面の　ち　長寿

初丁の　狩めつ　ち　稲光

皆　義　て　ち　ぬ　中の　榜式

、

梅咲やまふもとの炭俵　芝光

日蛍や後ゝ暗き鳥幡ゝ下

いつ山を降てそ庶のうゝれ足

多仙を多多友な紀蛍ゝ風

、

うゝひ場のこて孫帆ゝはけて播舟鳳　毛

すゝ人ゝ胡桃　振蓬ふ暑ゝ

秋風やふくゝ為の中のたてこまて

初雪やいやゝくゝぬつまみ喰

、

是も又閑とゝるゝん　桃の史　啓史

林さの陽ゝ多ゝ多ゝかんこゝる

一年ゝ一度ゝ抜ゝ月

初雪を洗ゝ池の底みそ有ゝる

、

風さゝの庵そひゝゝ梅也　玉茉

ところてん格一ツ行やお月雨
足灯と秋の生垣鳴く音哉
出る月の月の明るき夜哉

、

竪よりも横に吹くを柳哉　玉城
芍薬の蕾論なる恨哉　角
傍の樹に凭やもむれる蛍哉
冬枯や世なるまゝの上

雨笠僧やもる隣れ笠の中　五宇
五尺ゑんもりはやめる
赤ひとり羽音を聞や時の雷
カゝる軒も唐木をきふゝる

、

生海苔や波の音ゝ張一ツ　五丈
眠れる気と情をもまれ日哉

葉の事の如きまるやかなる姿
初日の雪を書きてスセリ姫山

仝　　湖十

壊れまゝ年ふるひとの方丈
一通りの人は通りたる軒
四谷かゝ先のてなり菓のも
下山してあんのまゝ巨燈外
、

自然を増てスとも墨平砂
低石山皮月をはゝ雪式
うはゝなの猴肩きぬ玉条
人間一紙の口吸ふ約小冊
、

世上の御法ふるる　性この事　紙屋
文衣つねの柱をさるれり
初門やくとぬき橋の水ひ

偽りのなき世界や春雨

、

梅酒のたなびかんめる草端

石川のほとりをさまして笛吹

吹えひる風の散る木の葉哉

獺の戻りを出る初うま

、

新宅（妻と）

梅のむ一の容

五月雨や四方に流るる水の音

移妻や竹の二四を枝垂

旭さす四畳敷の所中哉

、

それ嗤嗤そ春の入日哉　祖翁

鶯きひの一さえ雪降る

ふるふ咲や蜂菜も菓の内

風や東ふる冨士一つ

大尾

母の雛古きの都をかすめ屋　青峨

ところ〳〵淋夏殺やかすまし

名月や戸障るも種はいつまで

挑燈のさるる息吹きさるれば

黙斎泉譜

長	三点
朱	五点
海棠春	七点
高山流水	十点
響字	十五点
金声玉振	十八点

跋

年賀に来る人の多く
初めて書を学ぶ時使ふ
又手習草紙十帖位
一字一句の點を加へ
[illegible]風流[illegible]

かの西施り顰ひなるべし
一ヵ十字招魂のひとまきと
おもひもの四巻かくまきと都会
しるやうに默斎（櫛比
田乙）是を持ちる
名代表の安徳いたる
秘めをのんふさふ
未仲間にはなすとの角
ちんやうにいふ石上の
山神の橋を橋
ものとかくかくかく辞
ちれも京面白
と